

四単位形式舞踊創作の理論と実際

すずき まりこ
鈴木 方里子

1. はじめに

本学では、初等教育学科創設以来、表現活動の授業としてダンス、舞踊創作が取り入れられている。現在では、初等教育学科における体育(実技)の授業時に、また人間環境学科では、体育Ⅱの授業で舞踊創作を行っている。その授業のねらいは、学生の表現能力の向上、豊かな感性の育成などである。

本稿の目的は、学生の表現活動の実際を捉え、舞踊理論に基づく授業や指導法が的確に行われているかを確認することである。また創作を基本とした身体活動を通して、学生たちの中に連携が生まれ、社会性、協調性が養われているかなどを確認することも合わせて目的とする。

2. 舞踊

2.1 表現と舞踊

舞踊には多くの分野がある。特に本学での授業は、ドイツ表現主義舞踊に端を発した創作舞踊を基礎としている。創作舞踊は、舞踊領域の中で特に狭義の舞踊と限定され、特に内面を表現することを目的とする舞踊である。

創作舞踊の第一歩は、まず感じることから始まる。自分を取り巻くすべての事象に関心を向け、そこから自身の表現しようとする内容を核として捉え、独自の表現、すなわち動きへと結びつけていく。その過程が重要で、表現の基礎であると考えられる。それを核からの

解放とするならば、また逆に核に向かう流れも存在する。

佐々木は、「表現は、自己の内面的、心的活動を身体を通して外部的、客観的に表す働き、すなわち外面化したものであり、その表現された事象により、逆に内面をはっきりと把握することができるのである。」¹⁾と述べている。舞踊創作は、表現という手段を用いながら、自己の核を中心として内面、外面への双方向に働きかけられるものである。

その内面から外に向かって表出された情緒(Emotion)はさらに対象者を広げ、鑑賞者の内面に感動を引き起こす。そこに演技者と鑑賞者の間に一種のコミュニケーションが生まれる。その構造について「優れた作品を鑑賞した際に得た感動は作品の中に作者自身の内面の表現をみたということだけではない。そのような感動は同時に、作品のうちの、自己の何たるかを探求する観照者自身の内面表現を発見したことであり、それはまた、やがて自己表現につながることになることもあるだろう」²⁾と深田は述べており、互いに自己啓発する意味も持ち、表現活動は、教育の場で有効であると考えられる。

2.2 表現と形式

表現活動の基礎は、自己の内面を外面に表出することである。舞踊は、主体と客体が一致していることから、多くの芸術分野の中で

最も表現が容易であると考えられている。しかしその弊害として、あまりに直接的であるために、学生たちは舞踊をいやがる傾向にある。その理由として、訓練されていない身体を直接的に示すため、学生が羞恥心を持つことや、方法論が指導者によって示されていないことが考えられる。

授業開始前には学生に高等学校時代の創作実習について質問をしている。多くの教師は、表現することは重要と考えながらも、ただやみくもに「創作しなさい、創りなさい」と言うだけで方法を指導していない場合が多いように思われる。それは指導者に方法論が確立されていないからである。

そこで、「この表現に形式を与えることが舞踊の創作である。」³⁾と渡辺が示しているように、表現方法として指導形式が確立されている教育舞踊の理念⁴⁾に基づいた四単位の形式を用い、授業展開を行っている。

それは1フレーズを基礎とした四単位の形式を持つ舞踊創作であり、その方法を用いた創作指導を行っている。

また、舞踊創作から作品発表にまで至るに

は、①舞踊創作の題材、②作品のモチーフ、③作品の形式、④作品の組み立て、⑤伴奏音、⑥衣装、⑦舞台演出⁵⁾など、多くの要素があるが、本授業ではダンス教室を用いた平場での発表であるため、⑤までの5要素を取り入れ、実施している。

3. 体育授業時における創作活動の実際

3.1 平成18年度の授業に関して

初等教育学科1回生EFグループ34名、GHグループ34名の2グループ計68名の学生を対象に、体育(実技・講義)の15時限中、後期7時限を使って四単位形式創作舞踊を制作した。また人間環境学科では、2グループ53名(再履修者3名)の学生を対象に、体育Ⅱの授業時に創作活動を行った。7時限目には最終発表を行い、成績評価を行う。

3.2 創作活動の実際

創作のためのカリキュラムは、表1である。授業における指導と実際を時間ごとに区切り提示する。

表1 四単位形式舞踊作品の創作カリキュラム

	指導項目	内容説明	課題実習
1時限目	Rhythmusについて RhythmusとMetrum Rhythmuspattern	リズムとリズムパターン リズムと拍子について 単一リズムと複合リズム	単一創作リズムパターン 二人組8呼間 複合リズムパターン創作・発表
2時限目	四単位形式舞踊創作 ABCD単位 問と答について	題材・題・グループの決定 四単位形式の創作説明 言葉のMotivから動きのMotivへ 資料①配布	動きのMotiv創作 8呼間動きのMotiv、8呼間の発表
3時限目	A単位創作 空間の使い方	A単位の説明	創作実習・発表 A単位32呼間、問と答、発表
4時限目	B単位創作 伴奏音について	B単位の発展について 伴奏音について説明・制作	創作実習 A単位からB単位へ
5時限目	C単位創作	コントラスト(対照)の創作説明 強と弱、早と遅、大と小	創作実習
6時限目	D単位創作		創作実習、通し練習
7時限目	発表会	評価について 評価表と評価方法 資料②配布	練習 発表・評価

[1 時限目]

〈講義〉 Rhythmus について

Rhythmus、Metrum と Rhythmuspattern の説明をする。

リズムとは、同様な出来事が繰り返された時に起きる現象である。また、ある一定の長さの中にリズムを組み込んだ、一連の動きをリズムパターンという。

心臓の鼓動や呼吸などによって最も身近にリズムパターンを感じるのは人間の身体である。また朝、昼と夜など、地球の自転や公転により、日常生活の中でもパターンを感じることができる、などの説明を行う。

次に8呼間の長さで独自のリズムパターンを創る。8拍手し、独自のリズムパターンを口ずさみ、リズムパターンの理解をさせる。その際、8拍の中で単調なリズムを刻まないように指導する。

〈実習〉

- ①各自で8呼間の単一リズムを創作する。
長さ：8呼間で独自のリズムパターンを創作する。
距離：ダンス教室の端から端まで同様なパターンを繰り返し、移動する。
内容：アクセント・アピール・動きの強弱を取り入れる。

- ②次に二人組となって単一リズムを組み合わせ、複合リズムとする。

この複合リズムが創作舞踊の基本であることを理解させる。

- ③20分の練習後、各グループで発表。(写真1)

[2 時限目]

〈講義〉 四単位形式舞踊創作

四単位形式創作について説明をする。

創作の前に、グループを決定する。グループ人数は、ソロから6人までと限定している。小人数の方が、すべての内容において決定が容易で、まとまりやすいという理由からである。

次に創作の拠り所とするために題材を与える。題材の中から表現したいと思われるものを1つ選び、話し合いによって題を決定する。
題材：人間・生活・自然現象・社会現象
題：題材から題を決定する。

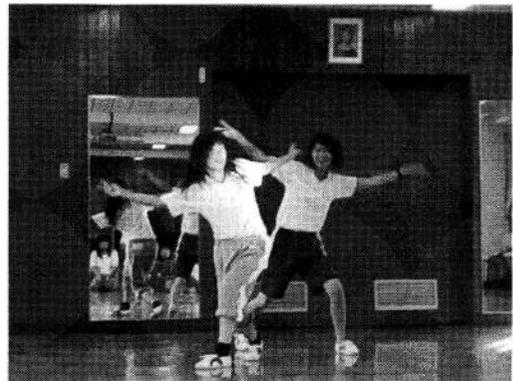
言葉のモチーフ：題から表現したい内容を表す形容詞一語を決める。それを言葉のモチーフとする。

たとえば、社会現象の中から朝のラッシュ時の混雑した様子を捉え、題を“ラッシュ”と決める。そこから、慌ただしい様子を表すならば、形容詞は慌ただしいとし、それを形容詞の名詞的用法で表し、慌ただしさとする。また自然現象から花を表現したい場合には、花の種類を限定し、その花の持つ特徴を形容詞で表す。たとえば、冬に凛と咲く薔薇の表現ならば、“白いバラ”という題とし、形容詞の名詞的用法によって、冬の寒さに負けず凛と咲く強さとする。

このように題からイメージされる内容は多いが、話し合いによって表現対象を限定し、形容詞の一語に集約することが大切である。この時点で表現する対象物と内容を明確にさせておかないと、ストーリーを創ることになり、表現が稚拙なものとなる可能性が高くなる。

言葉のモチーフである形容詞を8呼間の運動に置き換える。この8呼間の運動を運動の

写真1 創作風景(複合リズム発表)



モチーフ、Mと表す。(表2)

A単位の8呼間はMと表す。その後の8呼間はMに対応する答の運動となる。問と答の関係になるよう16呼間を創る。

問と答の関係とは、16呼間終了した時にひとまとまりの運動となるものである。問と答の関係となった単位をフレーズという。

B単位は、A単位の発展とする。①リズムを変える、②空間を変える、③運動を変えるという3方法を用い、A単位を変化をさせる。

C単位は、A、B単位のコントラストとなる運動を考える。言葉でのコントラストではなく、動きのコントラストとすることが重要である。

D単位は、AまたはB単位の繰り返しでもよい。最後は終止形とする。

〈実習〉各グループに別れ、題材を選ぶ。その後題を決定し、形容詞のモチーフを決める。

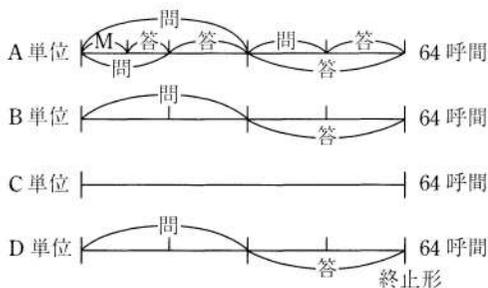
プリント「創作ノート」資料①を配布し、グループとメンバーを固定する。

その後、言葉のモチーフが妥当であれば、動きのモチーフを創る。それをMと示す。

[3時限目]

〈講義〉空間の説明

表2 四単位形式創作



- Aフレーズ: M(問と答)
- Bフレーズ: 発展(問と答)
 - ①リズムを変える
 - ②空間を変える
 - ③運動を変える
- Cフレーズ: コントラスト(問と答の関係にしなくともよい)
- Dフレーズ: AまたはB単位、最後を終止形にする

舞踊は空間と時間の統合芸術である。創作空間を形成するためには、個運動(一次運動)と空間運動(二次運動)の2空間が必要である。つまり個運動を行う空間と、実際に動き回る空間である。動きを単調にしないため、8拍の個運動の中にもリズム、アクセント、強弱を取り入れ、一連の流れのある動きを創ることが大切である。

〈実習〉2つの舞踊空間の説明の後、問と答のフレーズ32呼間を発表する。

[4時限目]

〈講義〉伴奏音作り

作品のテンポに合わせた伴奏音を創る。

最も良い方法は、作品に合わせ、打楽器などで自分たちで製作することである。多くのグループは、既成の音楽CDなどを使用し、作品に合わせた長さに編集し、伴奏音としている。

クラシック音楽、歌謡曲、カラオケバー

創作ノート 資料①

4単位舞踊作品 創作ノート No.1

環・初1.2 _____ グループ

番号	氏名	番号	氏名	番号	氏名

題材 _____

題名 _____

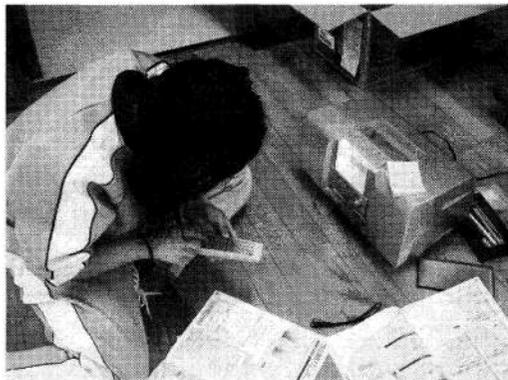
言葉の Motiv (形容詞) _____

ジョン、歌詞付き洋曲の使用は禁止している。それらの曲にはすでに主題が表現されているため、伴奏とは成り得ないからである。

伴奏音には必ず前奏を加える。伴奏音の終止は効果を増すために、作品の終止の形態によりフェードアウトか、カットオフのどちらか最適な方法を選択する。

〈実習〉 3時限目の続きを行う。またA単位の完成グループは、伴奏音となる音源探しを行い、その音が作品とのテンポ、雰囲気が合致していれば録音し、伴奏音を完成させる。(写真2)

写真2 創作風景(伴奏音作り)



[5時限目]

〈実習〉 C単位創作

C単位創作は、A、B単位の対照となる動きを創る。特にC単位については、フレーズとしなくてもよいことと、A単位のコントラストとなる動きを指導する。

各グループで完成したところまでを発表する。

[6時限目]

〈実習〉 D単位創作

完成した伴奏音との合わせを行う。最終的な指導を行う。

[7時限目]

〈発表会〉 (写真3・4)

発表の際の注意点は、声を出してカウント

しない・笑わない・間違っても続ける等、事前に注意をする。

練習の後、リハーサルを行う。評価を記入するプリント「評価表」資料②を配布し、学生もそれぞれの作品を鑑賞して評価する。

評価する内容は①動き、②モチーフ、③伴奏音、④練習の4要素で、それぞれABCDで評価をする。その後、本番を行い、舞踊作品の合格・不合格の判定を行う。

4. 結果および考察

平成18年度の学生の題名とモチーフは、表3に示す通りである。

不合格は初等教育学科では、休火山、Sea Animal futuring marmaid、ひまわりの3作品、また人間環境学科の不合格は、クッキン

写真3 発表会風景[活火山(A単位)]



写真4 発表会風景[ダイエット効果(A単位)]



評価表 資料②

創作舞踊 評価表

人・初 回生 クラス 番氏名

1	題 ()	感想		
	動き モチーフ 伴奏音 練習			
2	題 ()	感想		
	動き モチーフ 伴奏音 練習			
3	題 ()	感想		
	動き モチーフ 伴奏音 練習			
4	題 ()	感想		
	動き モチーフ 伴奏音 練習			
5	題 ()	感想		
	動き モチーフ 伴奏音 練習			
6	題 ()	感想		
	動き モチーフ 伴奏音 練習			
7	題 ()	感想		
	動き モチーフ 伴奏音 練習			

グイート、私たちの生活、春の風の3作品であった。不合格の理由は、創作過程が理解できない、また欠席者が多くて創作ができないなどという人為的理由や理解力不足などによる初歩的な理由と、作品の捉え方、表現方法の間違いという、やや高度な内容による2種類の原因があることが分かった。

特に休火山のグループは、題とモチーフの捉え方が間違っていたため、作品の終止の部分に矛盾があったので不合格とした。後日、活火山、激しさと題とモチーフを変更し、さらにCフレーズを作り直し、合格とした。

Sea Animal futuring mermaidのグループは、題を海の中と変え、動きを抽象的なものに変更したので合格とした。またEnjoyのメンバーは、欠席者が多く2名失格、発表前に退学をし、授業そのものが困難となる場面もあった。

各授業時間の受講者の態度や創作の能力により、グループごとの進捗や内容表現に大差が表れた結果となった。また、他のグループも後日発表を行ったので合格とした。

創作に関して、学生が最も困難だと思う部分は、抽象的な事象を身体運動に移行する場面である。題が具象的な内容であれば、身体運動への移行は簡単である。しかし抽象的なものを表現する場合、借りてくる運動がないため身体表現への移行がなかなかできない。その解決法は、感覚的に事象を捉える、また抽象的に捉えるための表現技法が必要であろう。

次の課題は、題の捉え方である。題から連想する対象物が具体的であれば、モチーフも簡単に決定でき、作品作りは容易となる。しかし仮想することが困難な題となると、運動が行き詰まり、題を変える、創作できない等の悪循環となる。

また、各時間ごとに発表時間を設けたが、できていない、欠席者がいる、まとまっていないなど、様々な理由をつけて各時間に発表せず、最終的にこの事実が露見する場合もある。創作過程の早い段階で的確に、よりよい指導や運動の提示を行うことも今後の課題である。

完成までの過程において、自分の意見を主張したり、話し合い等により問題解決を図るなどのグループ内での活動は、円滑に行われていた。こういった場面を通して、社会性や協調性が養われ、それと同時に内面の成長があったように思われる。また、作品の完成と共に充実感や達成感をも味わわせることができた。

作品が完成した段階で、さらに美的要素を増すために、目線や指先、群の動きなど、さらに細かな指示を与えた。すると学生は、より一層上手く、美しく踊ろうと努力し、グループごとに感情面が高揚している様子が窺えた。また、最終的な細部の指導により、学

表3 平成18年度 創作作品一覧

初等教育学科					
EF グループ			GH グループ		
	題	言葉のモチーフ		題	言葉のモチーフ
1	スタランブル交差点	忙しさ	1	花火	楽しさ
2	遊園地	楽しさ	2	綱引き	楽しさ
3	バブル	豊かさ	3	ひまわり	力強さ
4	Sea Animal futuring mermaid	楽しさ	4	災害	激しさ
5	休火山	危うさ	5	バーゲン	忙しさ
6	ダイエット効果	嬉しさ	6	和	勇ましさ

人間環境学科					
1 グループ			2 グループ		
	題	言葉のモチーフ		題	言葉のモチーフ
1	だるまさんが転んだ	楽しさ	1	体育	楽しさ
2	ちゃりんこ	運動美	2	森	不思議さ
3	クッキングイート	楽しさ	3	エレクトロカル パレード	楽しさ
4	私たちの生活	楽しさ	4	春の風	穏やかさ
5	Enjoy	楽しさ	5	遊園地	楽しさ
			6	チアーポップ	明るさ

生の美的センスの向上が感じられた。

いかなる年齢層においても、芸術活動、表現活動を行うことは重要で、その完成までの過程において美的センスは向上していく。そして、そういった経験を通して感性が育っていくのではないだろうか。

次年度は、①学生の能力に合わせた創作時間を勘案し、②内容の充実を図る。また、創作意欲を持続させるための助言を与えるなど、物理的・精神的サポートをしつつ、学生の内面の教育に重点を置き、創作活動を実践していく。

5. 終わりに

創作活動は、年々困難となってきた。コミュニケーション能力の欠如、感情表現が不得手などの若者文化の特徴とされていることが、本学でも顕著に現れている。しかし感

性の鋭い学生や、踊ることが好きだという学生も多くいる。この授業を通して、成就の喜びや、また1つのことを成し遂げたという達成感などの経験を通し、より豊かな内面の成長を望むものである。

引用文献

- 1) 佐々木ヒサ：感じ・考え・創らせる音楽リズム，タイムス(1978)，50頁
- 2) 深田進他：芸術表現 5つの焦点，法律文化社(1998)，39頁
- 3) 渡辺江津：舞踊創作の理論と実際，明治図書(1974)，16頁
- 4) 舞踊家 舞踊教育家 邦 正美氏：(1908～2007年)，日本教育舞踊研究所主催
- 5) 邦 正美：舞踊創作と舞踊演出，論創社(1989)，VI～VIII頁

参考文献

- 1) 邦 正美：美舞踊の美学，富山房(1974)
- 2) 石川博子編著：創作舞踊の理論と実際，黎明書房(1992)
- 3) 加藤禮子・高柳美津・杉浦とく：舞踊としての動きのリズム，明治図書出版(1978)
- 4) マーガレット N. ドウブラー，訳松本千代栄：舞踊学原論－創造的芸術経験－大修館(1974)

(受理 平成 20 年 2 月 21 日)